

精霊と少年は黄昏に笑う

紺狐(めっちゃ弱い)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

貴方は不安になったことはないだろうか。

自分だけが不幸じゃないか、と。

不幸というものは不思議なもので、不幸と同じくらい幸福というものが存在する。

それは誰が決めたものでもない、神が決めたものだ。

もしも、幼少時にこの世の地獄というものを味わったのならば、それは――

――幸福を手に入れる、前兆なのかもしれない。

これは、幼少時に全てを失った少年、霧崎時雨(きりさきしぐれ)が幸福を取り戻していく物語である。

※カクヨムにて同作投稿中。

目次

第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
		邂逅		
25	20	12	6	1

第1話

「私の事、忘れないでね」

それが、俺の愛した女性の最後のメッセージだった。世界というものは残酷で、いつも人間から大切なものを奪う。世界が定めた幸せの杯からこぼれ落ちた者を不幸にし、杯に留まった者だけを寵愛する。

それは世界の真理であり、絶対者が決めた定義である。

もしも神という存在が実在するのであれば、それはとても美しく、とても憎たらしい顔をしていることだろう。

なんせ——

——こんな残酷な世界に、人間を閉じ込めた張本人なのだから。

——時雨 side

「はあ……」

俺——霧崎時雨は昔の事を思い出し、憂鬱に浸っていた。

俺の過去は一般人と比べると特殊だ。

6歳の頃に家族を虐殺され、10歳の頃には最愛の人を亡くした。世界から愛されることのなかった人間、とでも言えば良いのだろうか。

こんな言い方をすれば、多少は格好良く聞こえるかもしれない。だが実際にこんななことを体験してみると、そんな悠長なことは言っていられない。

どこにもぶつけようがない怒りと後悔、大切な人を失った喪失感は一生涯につきまとう。

でももし、本当に神様が存在するのなら——

「冴姫に……会いたい……」

——1度だけでいいから、冴姫に会わせてください。誰にも聞き届けられないことのない、儂い願望。

少年の願いが叶えられたこと1度も無く、今日もまた当たり前のように消えていく。

願えば神様に叶えてもらえる、なんて甘い考えは持っていない。だが神頼みでもしなければ、すぐにでも壊れてしまいそうなほどの心は脆くなっていた。

ふとあたりを見回してみると、視界に勿忘草がはいる。その瞬間、脳裏に一つの言葉が浮かぶ。

「フォーゲット……ミー……ノット……」

フォーゲットミノーットというのは、勿忘草の学名だ。

勿忘草の花言葉である『私を忘れないで』という意味がある。

生前の彼女は、この花の花言葉をとても気に入っていた。

自分を覚えていてくれる人が一人でもいる事ほど嬉しいことは無いよねと言つて、無邪気に微笑んでいたのを覚えている。

俺は冴姫を忘れない為にこの花を自宅で栽培している。

気のせいかもしれないがこの花を見ると、冴姫が俺に『頑張れ』と言っているような気がした。

「そうだよな……ごめん……もう少しだけ……頑張るよ……」

勿忘草のおかげでなんとか立ち直ることに成功する。

そしてベッドから起き上がり、台所に移動する。こんな調子で、俺の朝は始まる。

朝はどうしても感傷的な気分になってしまう。

寝起きだからということもあるのだろうが、たぶん昔の——主に、俺のトラウマになっている夢を見ているせいだ。

普段は割と明るい性格なのだが、昔のことになると自虐的になってしまうのは俺の悪い癖だ。

「今日は……簡単にすませるか」

俺は軽くつぶやくと、冷蔵庫に向かった。

一人暮らしを長い間やっているせいかな、料理はそれなりにできる。オムライスやハンバーグなどの一般的な家庭料理はもちろんのこと、フレンチなんかも作ることが出来る。

まあ、初めて作ったりするのは味の保証はできないが。

「さて、始めるか」

そう呟くと冷蔵庫から卵とチーズを取り出してスクランブルエッグを作り出す。

スクランブルエッグを作る時にチーズを加えるとトロツとして美味しくなる。

まあ、チーズを焦げつかせたりすると酷いことにはなるが。

「よし、できた」

できあがったスクランブルエッグを皿に盛り、黒胡椒を軽くふる。うん、いい感じにできた。

あとは冷蔵庫にあった野菜とチーズ、それとハムでも使ってサンドイッチでも作るか。

そんなことを考えていると――

「どいてどいてどいてええええええ!!」

――一人の女性が、リビングの窓を突き破って台所に突っ込んできた。

急な出来事に反応することが出来ず、そのままぶつかってしまった。強い衝撃が、俺の体を突き抜ける。

後ろが壁だったおかげでなんとか吹き飛ばされなかったが、そうじゃなかったら確実に数メートルは吹き飛ばされていた。

「痛てえ……何が起きた……!?!」

全身は痛いけど、なんとか体は動かすことができる。声も問題なく出すことができるし、感覚もある。

死んだ訳では無いようだ。

それにしても、女性とぶつかった時から感じられる柔らかい物体が俺の体に……って、まさか!?

「いたた……って、大丈夫!?怪我とかしてない!?!」

目を開けると、黒いローブを羽織った女性が俺のことを抱きしめる形で質問していた。

何この状況。俺はただ、朝食を作っていただけなんだから。

「あ、ああ。怪我はない。あと、そろそろどいてくれないか」

「――ッ!!」

女性は顔を赤くして俺から離れた。

俺に言われるまでは、特に意識をしていなかったらしい。何か悪いことをしたかな。

「おいおい、こんなところまで逃げてきたと思ったら男とラブコメか？ いいご身分だな」

そんなことを考えていると、赤い槍のようなものを持った男性が台所に侵入してきた。

何を言っているんだこいつは。

そもそも俺は冴姫一筋だ。見ず知らずの女性とラブコメなんぞするわけないだろ。

と言うか、なんでこいつは槍なんてものを持っているんだ。

日本の警察は何をしているのだろうか。こいつ完璧に銃刀法違反をしているぞ。

「そ、そんなわけないでしょ!?!これは偶然よ!」

女性はムキになって否定する。

そうだ別に俺はラブコメ展開なんて望んじやない。日常系の展開を望んでいるんだ。

俺は平凡で幸せな人生を歩みたいんだ。

「とりあえず、見られたからには死んでもらうか。《こつち側の人間》、というわけでもなさそうだしな」

「なっ!?!ふざけんな!殺されてたまるかよ よ!」

なんで俺が殺されなきゃならないんだよ!?

「それはお前が決めることじゃねえよ。刺し穿て」

男が言葉を紡いだ瞬間、男が持っていた赤い槍は俺の心臓を貫いた。

あまりの出来事に女性は反応できなかつたようで、俺の姿を見た瞬間驚きを隠せずにいた。

槍の速度は人知を超えたものと思わせる程速く、まるで刺さることが決まっていたかのようだった。

「こんな……ところで……俺は……死ぬのか……ッ……ゲホッゲホッ」

吐血をしながら男を睨む。

刺された部分から血が噴水のように溢れ出す。

なんでいつも、他人の事情で殺されるんだ。

家族は殺され、冴姫は病気で死んだ。なんで、俺はこんなにも不運なんだ。

「恨むなら自分の不運を恨むんだな」

目の前が霞み、意識が遠くなる。

だが、そんな中でも俺は怒りを胸に抱いていた。不運？ただ、運がなかっただけで俺は殺されるのか。

何でこんなにも、俺は不幸にならなければならない。

「ちく……しょ……」

脱力感が全身を襲う。

意識を保っていられるのにもついに限界が来たようだった。

俺は力が抜けて行くことに抵抗することができず、そのまま意識を手放した。

意識を失う瞬間、金髪の少女が悲しげな表情を浮かべながら俺を見ていた気がした。

あれは一体何だったのだろうか。

第2話

目を開けると、そこは一面真つ暗な暗闇の中だった。

この暗闇には見覚えがある。

俺が子どもの頃——最も幸せだった頃の夢を見る前兆だ。

「一緒に遊ぼうよ・シグレレ！」

後ろから女の子が、俺に元気よく話しかける。

その瞬間、一面暗闇だった風景が夏の公園の風景へと変わった。

俺に話しかけてきた元気のいい女の子の名前は刀條^{とうじょう}シグレレ。

俺の初恋の女性であり、最愛の女性でもある女性だ。

冴姫はイギリス人と日本人のハーフで、その影響か金髪で青眼という容姿になっている。

顔立ちは日本女性のそれと同じなので、周りの子供からは気味悪がられていた。

まあ、俺は可愛いと思っていたけどな。

「ああーいいぞー！」

特に断る理由もないので、俺はいつも冴姫と遊んでいた。

断る理由も何も、冴姫と遊ぶのが楽しかったただけなだけけどな。

今思えば、この時から冴姫のことが好きだったんだよな。

「シグレレはさ、どんな花が好きなの？」

これは俺が冴姫に質問されたものの中で、一番心に残っているものだ。

なんといえばいいんだろうか。この時の俺は精神的に病んでいたというしか無いほど心が荒れていた。

だから——

「俺は睡蓮かな。花言葉が好きなんだよ」

——この時の俺は、滅亡を望んでいたんだ。

睡蓮の花言葉は滅亡。

当時、家族を殺されて間もない俺は、この世の滅亡を望んでいた。正直、それは今でも思う。

こんな俺から全てを奪いさつてしまう世界は、みんな壊れてしまえばいいんだ。そう、心の底から思っていた。

「そんな悲しい事言わないでよ。ボクはいつまでもシグレと一緒に居たいよ」

それは俺も同じだ。

だけど、そんな願いを踏み躪る輩は絶対に現れる。

これは世界の心理というものだ。人が幸せになりすぎてしまわないうようにする、神の人の幸せに対する抑止力。人の力ではどうしようもないものだ。

だからこそ、この世の全てが滅亡して欲しいと願うんだ。

「シグレの考えることは予想できるよ。だけどね、それじゃあダメなんだよ。確かにそうなら楽しいかもしれないけど、もしそうしたら今までであったことのない人の幸せまで奪っちゃうことになるよ。そんなことになったら本末転倒だよ」

ああ……そうだな。俺は人間として大切なことを忘れていた。

人のことを思いやるという、人間には欠如してはいけない「人間の心」というものを。

冴姫には、いつも助けられてばかりだ。精神的にも、肉体的にも。

なのに、何一つとして恩返しができないまま冴姫はこの世を去ってしまった。

俺は、いつも後悔してばかりだ。大切なものを失い、守れなかったと後悔するだけのただの道化^{ピエロ}。

世界は無情だ。いつも俺から大切なものを奪っていく。

そんな世界を、俺は恨んだんだ。

世界に対するどす黒い怒りを覚えていると、目の前が暗黒に包まれる。

そして次の瞬間、冴姫が影で虐められていた光景や俺の家族が殺さ

れた光景、そして冴姫を失った光景が一気にフラッシュバックする。そんな映像を見て、俺は強烈なまでの吐き気と恐怖に襲われる。それもしかたない。

常人ならばうつ病にかかるかと確信できるほどのトラウマを一瞬で目の前で再生されるのだから、平常心でいられる方がおかしい。まともな精神を持っているなら、この夢を見ただけで廃人になっていることだろう。

生憎俺はこの夢に慣れているから廃人になるということはないが、何度みても気分のいい夢ではない。

「……また、会おうね。シグレ」

冴姫の悲痛なまでの言葉で、俺の意識は現実を引き戻される。

目を開けると、目の前には見知らぬ天井が広がっていた。

どこだ、ここは。

たしか俺は台所にいたはずだが。

「よかった……目を覚ましてくれて……」

俺の思考を遮るように、女性の声が部屋に響き渡る。

その女性の声は、まるで何時間も泣き続けたかのように枯れていた。正確には、現在進行形で泣いているが。

声が枯れていてわかりづらいが、この声に聞き覚えがある。

たしかこの声は、俺とぶつかった女性の声だ。

「ん……？ どうしたんだ、そんなに泣いたりして」

「ごめんな……さいつ……私のせいで……貴方を危険な目に……遭わせてしまつて……」

女性は泣きながら、俺に対し謝罪を言う。

危険な目つて、俺は一体――。

ふと、赤い男が持っていた槍で貫かれたときの出来事が脳裏に浮かぶ。

そうか。俺はあの男の持っていた槍に貫かれて、死にかけていたのか。

それなら、この女性が泣いていたのにも説明がつく。

「アンタは悪くないだろ。だから泣かないでくれ。もう、女性の涙は

見たくないんだ」

俺は女性に対し、悲しそうな声音で言う。

何故かこの女性と冴姫を重ねてしまう。この女性を冴姫と重ねてしまうのは、俺のために泣いてくれる人だったからかもしれない。

単純だな、俺は。

どんなに泣いてくれたって、いつも理不尽な理由で俺の前からいなくなるっていうのに。

「……うん。分かったわ。ごめんなさい。私のせいで、貴方を不快にさせてしまったわね」

「いや、いいんだ。ただ、俺が女性の涙にトラウマがあるだけなんだ。気にしないでくれ」

「貴方、一体——」

「俺の名前は霧崎時雨だ。貴方と言われるのは、なんか慣れない」

女性の言葉を遮るように言葉を発する。

普段から人と話すということをしている訳では無いが、「貴方」だなんて他人行儀で呼ばれるのは慣れない。

せめて名前で呼んで欲しい。

「わかったわ。これからは時雨君と呼ばせてもらうわ。……ファーストネームで呼ぶのは失礼かしら？」

「いや、そこは気にしないでくれ。苗字で呼ばれるよりはそつちの方がいい」

「そう。時雨君が名乗ったんだから、私も名乗らないと失礼ね。私は伽弥乃^{かやの}アリス。気軽にアリスって呼んで欲しいわ」

「そうか。わかった、伽弥乃さん」

「わ、私をからかっているのかしら？」

女性——伽弥乃アリスは、顔を真っ赤にしてプルプルと震えながら俺を半眼で睨みつけてきた。

この人は子供っぽい行動もとるんだな。大人びているイメージがあったが、今の行動でそれが覆った。

もしも冴姫と出会っていなければの話だが、飽く迄出会っていなければの話だが。

「冗談だ、アリス。少しぐらいからかってもいいだろ。何かが減るものでもあるまいし」

「私の心の中にある大切な何かが減るのよ!」

それはきつと、乙女心とかそういうロマンチックなものだろう。

まあ、そんなもの俺には関係がないが。

「そんなことよりも、ここはどこなんだ?俺の家じゃないってことはわかるんだが」

「スルーされた!?まあ、いいわ。ここは、まそっは魔想派が所有する病院よ。普通の病院だと手遅れになるほど、時雨君の傷は酷かったのよ」

「ちよつとまで、魔想派って一体何なんだ?そもそも、あの男は一体誰なんだ?」

「その質問には私が答えよう」

不意に、ドアの方向から声が発せられる。

聞き覚えのない声に驚きドアの方向を向くと、そこには20代前半程の青年が立っていた。容姿は、黒髪と色白な肌が印象的な清楚系のイケメンと言ったところか。

つまり、俺の敵だな。

「おいおい、そんなに怖い顔をするなよ。別に俺はお前の敵じゃない」
イケメンというだけで俺——もとい、非リア充の敵になるというところが、こいつはわかっていないようだ。

イケメンなんぞ冴姫をいじめていたやつにもいたから、いい印象なんてものは無い。

決して顔がいいだけでひいきされてふざけんなよとか、女にちやほやされてふざけんなよとか、一々他人相手に色目使ってんじやねえとか思っている訳では無い。

決して、そんな私怨は無い……たぶん。

「俺は霧斗むと。キミをスカウトしに来た。俺達と一緒に、世界を変えてみないか?」

この出会いが、偶然か必然かは分からない。

だけど、これだけは自信を持って言える——

——この時、俺の運命が大きく変わり出した。

第3話 邂逅

「スカウトって何だよ。ってか、まず現状を説明してくれ。急展開過ぎてついていけないんだが」

俺は謎の青年——霧斗の言葉を聞き、混乱を隠せないでいた。

いきなりスカウトとか魔想派とか、一般人の俺にとってはただ混乱を招くだけのことでしかない。

一般人だった、というのが正しいかもしれないが。俺は普通とは到底言えないような出来事に、巻き込まれたのだから。

「ああ、すまない。そういえばキミは今、目を覚ましたばかりだったね。まずは説明をした方がよかったか」

変なところで抜けているのか、この人は。

説明してもらえないならいいが、少し抜けているイケメンとかこのアニメのキャラだ。お前の属性少し分ける。いや、分けてくださいお願いします。多分そんな属性が俺に加わったら、きっと人生が楽しくなるに違いない……たぶん。

「そうだな……どこから説明したものか」

「まずは今の世界の实情について説明した方がいいんじゃないですか？全くの一般人のようですよ」

「……そうだな、それがいい。それじゃあまず、俺達が住んでいる裏の世界について話をしよう」

アリスのフォローが入り、裏の世界についての話が始まる。

悪いやつじゃないんだろうが、絶対にどこかで逆恨みされてるだろう。主に女性にモテない輩に。

「まず、キミ達が住んでいる世界は表の世界だ。戦いなどとは関係がない、平和な世界。最も、一部の人間がテロや犯罪を犯すこともあるけど、裏の世界程ではないんだ」

霧斗は笑顔で恐ろしいことを口走る。笑顔で言っている分、余計に怖い。

この男は、俺を怖がらせたいのだろうか。

「まってくれ、裏の世界はそんなに恐ろしいところなのか？」

「八割正解で二割不正解って言ったところかな。別に裏の世界で犯罪が多発している訳では無いんだ。だけど、派閥同士の戦争が長年続いていて、いつ命を失ってもおかしくない程危険なんだ」

「どこが二割不正解なんだ。二割どころか一割すら不正解のところが見当たらない。危険すぎて本当に洒落になってない。」

霧斗は俺の事を無駄死にさせたいらしい。今のまま魔想派とやらに入ったとしても的に瞬殺されて終わりだろ。」

「……ああ、ごめん。説明不足だった。非戦闘員は基本的に命の危険はないんだ。ただ、その分前線で戦っている人間の死亡率が高いというだけで」

全くフォローになっていない。

わざわざスカウトに来るってことは、恐らくは前線で戦う人間を増やすためだろう。さっきの口ぶりだと、非戦闘員が不足しているようには思えない。だとすると、前線で戦う可能性が高い。」

つまり、死刑宣告を出されているのに等しい。」

「まあ、もちろんキミは最前線で戦ってもらうことになるけどね。キミには最前線で戦えるだけの素質がある」

勝手に俺に素質があると見込まないでくれ。俺はまだ死にたくない。最も、冴姫のいる所に確実にに行けるのなら、死んでもいいとは思うが。」

「聞いてるだけだとリスクしか無いんだが。素質と言っても、どうせあってもなくても変わらないようなものだろう？そんな素質があったら、まず俺はこんな状態になってないだろ」

「いや、それは違う。キミは素質を持っているから生きているんだ。普通ならあの槍に貫かれた時点で人間は死ぬんだ」

怪訝な表情を浮かべながらいう俺に対し、霧斗は俺の意見を真正面から否定する。

そんな素質なんかなければ、今頃は冴姫のところに行けたのかもしれないな。……悲観的になったらダメか。冴姫が悲しむ。」

「まず、順を追って説明するよ。その世界には主に二つの力が存在するんだ。一つは精霊と契約することによって手に入れることができ

る、精霊の力。俺達はこの力を靈力れいりょくと呼んでいるんだ。これは裏の世界ではそこまで珍しくないもので、悪くいえば誰でも持っているような当たり前のものなんだ。まあ、そう言っても靈力は強力で、ものによつては軽く使っただけでも山を一つくらいは消滅させられるんだ」

精霊の力——もとい、靈力強すぎないか。そんな力を持つてるやつがごろごろいる中で生きていけるのか。この俺が？かなりの確率で無理だろ。

「靈力自体はキミにも持たせるつもりだ。流石に靈力を持っている相手に生身の状態で挑むのは、無謀なことだからね。最も、キミには靈力さえも意味を成さないほどのポテンシャルを秘めているんだけどね」

「ただ俺の潜在能力は高いんだ。」

もしかしたら潜在能力だけで周囲を吹き飛ばすことが出来るんじゃないか？

もしできたとしても、するつもりは無いけどな。

「話を二元に戻そうか。精霊の力は確かに強力だけど、その力に対して対抗する手段がないわけじゃないんだ。それがもう一つの力である神器カミノウツワ。キミはそれを、宿している可能性が高いんだ」

精霊の次は神ときたか。

随分と大層な名前が出てきたな。カミノウツワだなんて、人間は神だと言いたいのだろうか。

「神器というのは精霊の力のように、他者から渡されるものじゃないんだ。一部の人間が生まれつき宿している奇跡のようなものなんだ。こつちの世界の人は神に授けられた最強の力という程、その力は強力なんだ。一般人が知っているような名の知れた偉人……それも、本当に一部のエリートは持っていたと言われているよ。例えば、ナポレオンやジャンヌダルクは確実に持っていたとされているよ」

流石にナポレオンやジャンヌダルクくらいは俺でも知っている程有名な英雄だ。そんな人物と同じ力を持っているかもしれない俺って、案外凄いのかもかもしれないな。

「そんな力を持つかもしれないキミが、俺の組織に入ってくれたら百人力だ。もちろん、戦闘訓練や生活の保証、ある程度の資金援助くらいはできる」

企業としてならかなりいい待遇かもしれないな。生活や金の保証、そして戦闘訓練までしてくれるならほぼ食いつぱぐれることは無い。

まあ、その分命をはらなきやいけないが。

命をはる時点でブラック企業とも言えなくはないか。いや、普通ならいうか。どうにも自分の命を軽く考えてしまうな。今に始まったことじゃないが。

「それに、この話はキミにとって悪くは無いと思うよ。……キミが会いたがっている冴姫という女性にも会える可能性が高い。いや、確実に会える」

霧斗の言葉を聞いた瞬間、俺の心臓がドクンツと高鳴った。

今、霧斗こいっなんて言った？冴姫に会えるだつて？霧斗が冴姫のことを知っているのは少し気になったが、そんなことは問題じゃない。冴姫に会えるだつて？一体どういうことだ!?

「おいっ！なんでお前が冴姫のこと……つて、そっちじゃない！俺が冴姫に会えるって一体どういうことだ!？」

俺は霧斗の胸ぐらを掴み、鬼のような形相を浮かべながら問う。

俺自身が死んだと知っている人間とどうやって会うと言うんだ。俺が死ねば会えるとしても言いたいのか？ならとつくに俺は自殺している。そんなことをしても会えないとわかってるから、こうして仕方なく生きているんだろうが。

「キミは、人間が死んだ後にどうなると思う？あの世へ逝くか、幽霊になるか。だいたいそんなところだろう」

「それが冴姫と会うこととどう関係があるんだ」

「まだわからないのか。人間は死後に精霊になるんだ。もし、こちら側に来てくれたら、精霊との契約は絶対にしてもらう。後は……わかるな？」

人は死ぬと精霊になるだど？もしそうだとしても、契約をする時に会えるかどうかなんてわからない。むしろ、会えない確率の方が圧倒

的に高いだろ。

「精霊との契約時に会える可能性が高いって言いたいのか？それはおかしいだろ。冴姫が精霊になっていたとしたら可能性はゼロじゃないだろうが、精霊なんて無数にいるもんじゃないのか？」

「確かに精霊の数は無数とも言えるほどいる。だけど、精霊の召喚方法の仕組み上、確実に冴姫という女性が召喚させる可能性が高い。精霊を召喚する時に使われるのはキミの思いなんだ。キミが一番会いたいと思う人や、好きだと思っている人が必然的に召喚される。つまり、今キミが会いたい人物——すなわち、冴姫という女性が召喚されるわけだ」

霧斗の言葉を聞き、俺は霧斗の胸ぐらから手を離す。

「ははっ、魔想派に行けば確実に冴姫に会うことができるのか。そんなこと言われたら、魔想派に入る以外の選択肢があつてないようなものになる。」

「ああ、たぶんキミが疑問に思っているであろうことについて答えさせてもらうよ。俺が冴姫という女性を知っているのはキミの身の回りで起きたことを調べたからだ。ある程度は調べておかないと、仲間を迎え入れようにも迎えられないからね」

こいつストーカーか。

たしかに、俺を仲間に迎え入れる上で俺の身の上を調べるのは当たり前だ。だが、俺が好きなのやつまで調べる必要はあったのだろうか。

霧斗は、俺の中で変態認定しておこう。悪気はない訳では無いが、これくらいは許されるだろう。

「はあ……分かった。魔想派に入るよ。ただし、俺を冴姫に絶対に会わせるってことが条件だ。それくらいはいいだろ？」

「ああ、約束する。キミを冴姫に会わせる」

俺の言葉を聞き、満足そうな笑みを浮かべる霧斗。その姿は、男の俺から見ても華があるように思えた。決して俺がホモな訳では無い。「そういえばさつき霧斗は『世界を変えてみないか』って言ったが、それはどういう意味だ？」

ふと、思い出したように先程霧斗が言っていたことについてきく。

ただ、中二病発言をしたかった訳では無いだろう。恐らく、何らかの理由があるはずだ。

「ああ、それは俺達魔想派の最終目標だ。俺達の最終目標は、世界の統治。そして世界の変革だ」

何かしらの理由があると思っただが、まさかここまで大規模なことをしようとしているとは思わなかった。新世界の神にでもなりたいたいのだろうか。

「世界の変革って、どんだけ大規模なことをしようとしているんだよ」「世界の変革はいずれ誰かがしなければいけないことだ。ただ、それを俺達がするというわけだ。世界を変革するためには、まず統治することが必要だ。だから、俺達の今のところの目標は世界の統治というわけなんだ」

筋は一応通っているか。変革しようにもまずは統治しないことには始まらないか。統治したところでなし得ることが出来るかはわからないが、ただ可能性は今よりも高くなるか。

「叶えられるといいな、その願い」

俺は悲しい声音で霧斗に言う。恐らく、霧斗は世界に対して何かしらの恨みを持っているのだろう。そうじゃなければ、ここまで大規模なことをしようとは思わないはずだ。

「わかってるさ。この目標だけは、絶対に叶えてみせる」

霧斗は俺の言葉を聞き、苦笑しながら答える。

俺も、冴姫に会うために頑張らないとな。世界の変革とか俺には規模が大きすぎてよくは分からないが、とりあえず俺は目の前の幸せをつかむことに集中する。それだけで、冴姫に近づける気がするから……。

「それじゃあ、明日から魔想派として動いてもらう。そうだな……明日からは戦闘訓練をする。ある程度技術が身についたら精霊との契約に移るから、頑張れよ」

「おう」

明日からか。……そういえば、学校はどうしようか。無断欠席なんかは洒落にならないぞ。今更すぎるかもしれないが……。

まあ、なる様になるか。

そんなことを考えながら、俺は冴姫のことを思い出す。待っててくれ、冴姫。また、必ず冴姫と会えるように頑張るから。

——霧斗side

「良かったのですか？あんなことを言ってしまった」

時雨のことを思ったアリスの言葉に、嫌悪感を覚える。

別に嘘はついていない。会えることには会える。ただ、望んだ結果とは違うかもしれないだけだ。

「いいんだ。別に嘘をついたわけじゃない。それに、ああでも言わなかったら、あの少年——時雨はこっち側に来なかったんじゃないか？」

「それはそうかもしれませんが……」

「あれは、誰しもが通らなければいけない道なんだ。アレを突破できなければ、遅かれ早かれ時雨は死ぬ。これは仕方が無いことなんだ」
いつもそうだ。俺は自分の目標のために全てを犠牲にしてきた。仲間だろうと、他人の心だろうと。

そんな生き方は、今になって変えられるものじゃない。もし、ここでこの生き方を変えてしまったら、今はまでに犠牲になった人達に申し訳がつかない。今はまだこのままでいいんだ。いずれ達成させる、俺の目標のために。

「……わかりました。これ以上は何も言いません。ただ、一つだけ私の願いを聞いてもらえませんか？」

アリスは、時雨の事での願いを言うだろう。昔の自分と重ね合わせ、情が湧いたと言ったところだろう。別に止めるつもりは無い。止める理由もないし、止めたところでいうことをきくような奴でもない。

「私を、時雨君のコーチにしてください」

「……わかった。今現在をもって、アリス——お前を時雨の専属コーチに任命する」

「有難うございます」

アリスは俺に深い感謝を表すように、頭を下げる。俺はそこまですごいことをしたわけではないのだから、例をする必要は無いというのに。むしろ、そういう意見を俺に言ったアリスの方がすごいと言えるだろう。

「さて、俺も活動しなければね」

素晴らしいながら、俺は魔想派の本部に向かって歩き出す。俺はどんなことをしたとしても、この世界を統治する。

全ては――

――この腐った世界を、かえる変革ために。

第4話

——キミには明日から、魔想派の宿舎で暮らしてもらおう

これが霧斗からの初めての命令だった。

確かに、魔想派の宿舎に俺が住んだ方が何かと都合がいいのだろう。体調や摂取する栄養などの管理もしやすいだろうしな。

だが、十数年暮らしてきた我が家から離れるというのは、なかなか気分のいいものではない。

思い出深いものも、沢山あるわけだし。例えば……つてあれ、この家で思い出深いものなんてあったか。真面目に考えてみれば、俺の家は殺人現場以外の何物でもなかった。俺の家族が殺された場所であり、俺が殺されかけた場所だからな。思い出深いというよりは、怨恨の方が深いと言っても過言ではない。

はあ、余計なことを思い出してしまった。家族がこの家で殺されたことを思い出すなんて、それ以外この家に思い出がないとでも俺は言いたいのか。なにかほかにもあるはずだ。

……無いな。この家には冴姫ですら入れたことがなかったから、楽しい記憶なんてものは皆無だ。この家に冴姫をいたら、冴姫が穢れると思っただけで入れなくなかったんだ。

なんとはいえいいのだろうか。自身の家族が殺された場所は、俺の家族ので汚れていると自身思っているのだろう。まったく、俺の性格というのは不憫なものだ。

「さて、荷物をまとめめるか」

俺は感傷に浸るのをやめ、魔想派に行く準備を始める。ちなみに俺は今、自分の家の自分の部屋にいる。魔想派の宿舎に持っていく荷物を準備するためだ。

怪我はもう全治している。魔想派の医療はすごい一言に尽きる。

とりあえず、スマートフォンは持っていか。マンガの類はわざわざ持つていく必要も無いか。どうせ、魔想派に行けば同じものを買え

るだろうし。

「後は……これも持っていくか」

俺は机の上に置いてある指輪を手取る。

これは、俺の誕生日に冴姫が俺にくれたものだ。俺が通っていた学校では装飾品の一切が禁じられていたから、仕方なく机の上に飾ってたんだっただな。ああ、懐かしい思い出だ。

「時雨君。準備は済んだ？」

玄関の方から聞きなれた女性の声が聞こえてくる。この声は、伽弥乃アリスのものだ。

理由は知らないが、俺の専属教師になつたらしい。

今日も、専属教師だからといって俺の家まで押し掛けてきた。勿論、俺の荷物整理の手伝いという大義名分を片手に。

おそらくは何らかの負い目があつてこの場に來ているのだろうが、そんなことは俺には関係ない。気持ちにはわからないでもないが、別に気に止む必要も無いだろう。俺が偶然その場に居合わせてしまったのが原因であり、決してこの人が原因である訳では無いのだから。

「もう少しで終わるから待っていてくれ。すぐに行くから」

「分かったわ。それじゃあ、本部へ行く準備をするわね」

本部へ行く準備とは、転移のことだろう。簡易的な魔法陣で転移というものができるといい。俺は体験したことがないからよくはわからないが、アリス曰くとつてもいいものらしい。上手く説明できていないと思ったら負けだと俺は思っている。

「それじゃあ行くか」

準備をし終えた俺は、荷物を持って玄関に向かう。

結局のところ、持っていくものはスマートフォンと指輪、そして勿忘草を一株だ。うん、荷物が軽いと移動が楽だな、という一言に尽きる。

「すまない。待たせたな」

俺が玄関についた時は、既に魔方陣が描かれた後だった。俺の家にある玄関の近くには少し広い庭があり、そこに描かれてあった。

魔法陣の紋様は複雑かつ本格的で、普通に書くとしたら少なくとも

一時間はかかるんじゃないかと思えるほどのものだった。恐らく、何らかの力で瞬時に書いたのだろうか。精霊とかの話がされた後でそんな力があると言われても、何ら不思議ではない。

「えっと、荷物はそれだけなの？」

「これだけだ。別に、この家に思い入れなんてものはないしな」

アリスが何かいいたそうな表情で俺を見る。

俺の荷物なんて、アリスにはどうでもいいだろ。そんなことよりも、俺にとっては早く魔想派の方に行きたいという気持ちの方が大きい。

「……そう、分かったわ。色々と言いたいことはあるけれど、まずは魔想派の本部に行きましょう。話はそれからだわ」

アリスはなにか考えた後、魔法陣の上に立った。恐らく、魔法陣の上に立たないと転移ができないのだろう。最も、魔法陣が無くても転移できるのなら、魔法陣を用意した意味は無いのだが。

「ああ、わかったよ。専属教師さん」

俺が演技をしているようなわざとらしい笑顔をしていると、アリスは少し笑いをこらえていた。

何がおかしいのだろうか。俺の顔がおかしいから笑っているのか。失礼なやつだな、おい。

「それじゃあ、行くわよ。転移^{ムーヴ}」

アリスが言葉を紡いだ瞬間、俺とアリスは光に包まれた。刹那、全身にかかる重力などの力がなくなる感覚が俺を襲う。そして、それらが止むと俺達は見知らぬ部屋に転移していた。

周りを見渡すと窓はひとつもなく、部屋の隅に一つ扉がある程度だった。恐らくこの部屋は、転移用の部屋だろう。ただ部屋の空間だけを必要とされていると言うのが目に見えているような感じがして、俺はあまり好きになれそうにない。

「行くわよ、時雨くん」

転移して早々、アリスと俺は部屋から出てどこかへ向かう。何故か、犯人が収容所に収容されるような気持ちになった。まあ、冴姫に会うためなら収容でも何でもされてやるよ。

「ここが時雨くんの部屋よ。なにか不自由なことがあったら言っ
ね」

数分の徒歩の後に、マンションのような部屋に到俺する。部屋は一
般的な1LDKだった。部屋で不自由するということとはなさそうだ。
ここに住むやつが増えるということはなさそうだしな。

「ああ、言い忘れていたけれど、精霊と契約した時は同じ部屋に住ん
でもらうことになるわ。無いとは思うけれど、身元不明の人や住むこ
ろがない人を連れてきた場合もここに住んでもらうことになるから、
そのつもりでいてね」

俺は玄関の脇にあった棚に荷物を置きながら苦笑する。

即フラグ回収されました。後者はともかく、前者が問題だ。理性が
持つかどうかかわからない最悪な状態になりかねない。まあ、そんなこ
とをして冴姫に嫌われたら嫌だから、絶対にしません。

「ああ、わかったよ。そんなことよりも、精霊——冴姫に早く会いた
い」

「その前に、時雨君には戦闘技術を身につけてもらおうわ。それと、
神器カミンウツワとしての力の開放もね」

「……なんでだ?」

「それは愚問よ、時雨君。今の貴方が契約した所で、宝の持ち腐れにな
のがオチよ。なら、少しでも戦闘能力を上げてからの方がいいでしょ
う?それと、精霊との契約方法は——いえ、これは言わない方が良さ
そうね。後のお楽しみ、と言ったところかしら」

俺の第六感が、絶対にやばいことをやらされると告げている。恐ら
く、

「別に、冴姫が傷つかなければなんでもいいさ」

「その冴姫という女性が時雨君のことを本当に好きならば、喜ぶと思
うわよ?勿論、時雨もね」

「それってどういう——」

「さあ!早速訓練を始めるわよ!訓練場に行くから、はぐれないでね
!」

俺の言葉を遮るようにアリスは大声を発したあと、俺を手を握り走

り出す。手を握られたら、はぐれるも何も無いだろう。こういうところ
ろが少し抜けてるのか。なんか可愛いな、おい。
この時の俺は知らなかった。伽弥乃^こアリス^の女^めの鬼教官ぶりを。

第5話

「あの、アリスさん？私はなんで椅子に拘束されているんでしょうか？」

部屋を出た後、俺は何故かボールのようなもので後頭部を殴られ気絶した。しばらくして起きた時には、闘技場のような場所で四肢を鉄パイプの椅子に鉄の鎖で固定されて動けないようにされていた。

色んな意味で鬼教官だな、アリスは。できるだけ想像したくなかった、悪い意味で。

「何でって、これから訓練するからに決まっているでしょ？」

訓練ではなく、拷問の間違いだろう。

「別に、ひどいことをする訳では無いわ。今から時雨君の体に私の霊力を流して、カミノウツワ神器の力を解き放つよ。人間には反射というものが備わっていることを知っているわね？」

「ああ、一応は。たしか、熱いものを触った時に咄嗟に手を離すあれだろう？」

「時雨君が言ったのは脊髓反射ね。脊髓反射は情報を脳まで送らない分、早く動くことができるのよ。今回は、その性質を利用するのよ」「つまり、カミノウツワ霊力に反応して神器の力を解放させるってわけか。でも、それなら俺を拘束する必要は無いんじゃないか？」

「それは念のためよ。霊力を流した時に拒絶反応を起こして、全身に強烈な痛みが走る時があるの。大抵の場合、痛みを耐えきれずに暴れだすわ。つまり——」

「俺を暴れさせないようにするための保険って事かよ！こんちくしようッ！」

「やっぱ拷問じゃねえか！これで力が解放されなかつたら恨むぞ！」

まあ、これも冴姫に会うために必要なことなんだ。我慢するか。

「ああ、言い忘れていたわ。力を解放させて、体が慣れたら精霊の召喚をす——」

「よし、今すぐ力を解放させよう。今すぐにだ。一分だけ待つ。五秒

以内に支度し……がふッ」

俺の言葉を遮るように、みぞおちに肘鉄を食らわせる。流石に肘鉄は酷いと思う。

まあ、アリスの気持ちもわからないではないが、額を小突く程度にして欲しいものだ。

「落ち着きなさい。もう支度はできているわ。それに、五秒以内に支度をしたとしても、五十五秒余るでしょう。その間は どうするつもりなの？」

「そ、そんなの、俺の心の準備をする時間に決まってるだろ」

「はあ……まあ、いいわ。こんなことをする時間も無駄ね。さっさと始めてしまいましょうか」

アリスが俺の胸部に手をおいた瞬間、ドンツと強めの衝撃が俺の全身を襲う。反射的に目を閉じるも不思議と痛みはなく、恐怖心……というよりは安心感が俺を満たしていた。

なんだ、アリスの杞憂だったか。痛みなんてもの、起こる気配すらない。それどころか、全身の目に見えない傷全てが治っているような感覚だ。アリスが言っていたこととは正反対のことが起きている。

「……おかしいわね。そろそろ解放されてもおかしくないのだけれど」

胸部から手の感触が消え、その変わりに何かに抱きしめられるような感覚が襲う。

痛くないと解放されない鬼畜仕様なのか、それとも俺にその力が宿っていないかの二択だろう。

しかし、この抱きしめられるような感覚は何なのだろうか。嫌な訳では無いが、浮気をしているような気分になる。冴姫に申し訳ないという気持ち大きい。

「アリス。もしかして、俺を抱きしめているか？」

「そんなわけないでしょう。なんでそんな考えに至ったのかしら？」

「いや、さつきからなにかに抱きしめられているような感触があるんだ。これって、何か関係あるのか？」

「もしかしたら……。時雨君っ！誰か、好きな人のことを考えて！」

アリスはなにか考え事をした後、今までで一番大きな声を発する。情緒不安定か、この人は。

それにしても、好きな人か。つまり、冴姫を思い浮かべればいいのか。簡単な事だ。美しいブロンドの長髪に幼くも整った顔立ち、そしていつも着ていた白のワンピースがとても似合う少女の姿——冴姫を思い浮かべる。

——刹那。俺の目の前に少女が出現する。その容姿は俺が想像した冴姫そのものだった。ただ一つ、黒髪であるということを除けば。

「だ、誰だ!?お前は!」

「私はレスト。時雨に宿りし力。そして、時雨を癒すための存在」

レストが真顔で淡々と言葉を発する姿を見て、謎の違和感を感じる。

レストには感情がないのか? カミノウツワ 神器の力の副産物として作られた存在ならば、感情という不要なものを作らなくてもおかしくはない。

まあ、レストは存在自体が癒しになりそうだが。正直、俺が知っている冴姫にそっくりでときめきそうだし。

「時雨君。貴方の神器は、カミノウツワ この世界でも珍しい独立種よ。どくりつしゅ 私も実物を見るのは初めてだわ」

「独立種?なんだ、それ」

「言葉のとおりよ。カミノウツワ 神器の力が、意志を持って独立しているのよ。宿主——時雨君の好きな人の姿になるということと感情がほとんど無いのが特徴よ。最も、一緒に過ごすうちに表に出す感情が増えて、最終的には人間と変わらないようになるわ」

つまり、俺の欲望の塊ってことかよ。ときめきそうになるわけだ。冴姫と再会したら引かれるかもしれないが。

まあ、人間と変わらないようになるなら、それに越したことは無いな。いつまでも機械的な喋り方だと、こっちの気が滅入るしな。

「時雨は心が弱い。故に、私が癒さないと壊れてしまうと判断した。まずは拘束を外す」

レストが鎖に手をかざすと、まるでその場所に何も無かったかのようにならなくなる。

癒すというよりは、破壊の方が向いている気がする。

「これから、時雨を癒す。異論は認めない」

レストは俺に抱きついて、頬ずりをし始める。肌の柔らかい感触や女の子特有のいい香りが俺を刺激して、癒すどころか精神的にやばい状態になっている。

こいつ、俺の理性を崩壊させにきてるだろっ!? 確かに癒されているといえは癒されてはいるが、それ以上に理性がやばいっ！

「ちよっ、レスト！ 離れてくれ！」

「どうして？ 人間を癒すには、これが最適だと認識している」

「それ以上に俺の理性がやばいんだよっ！ アリスっ！ 引きはがすのをてっだってくれ！」

「嫌よ？ そもそも私では単純な力勝負では勝ち目はないわ。それに、時雨君も満更でもないんでしよう？」

アリスはニヤニヤしながら俺を見る。くそっ！ 後で覚えてろよっ！

満更……でもないが！ 超えてはいけない一線を越えそうで怖いんだよ！

「止まる理由がないなら続ける。時雨の理性が崩壊する可能性があるというだけでは、止める理由にはならない」

「それが一番の理由になるだろっ！ いいからやめろっ！」

「断る。時雨の心が安定するまでは絶対にやめない」

「こんな状況で安定するかああああああああ!!!」

その後、この状態が一時間ほど続いた。